
ハルケギニアの獅子心王（仮）

肥前のポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアの獅子心王（仮）

【Nコード】

N7172X

【作者名】

肥前のポチ

【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界に冴えないサラリーマンの主人公が迷い込む？主人公は仕事の帰り突然ゼロの使い魔のハルケギニア大陸に来ることになる。

召還された訳でもなく、誰かに憑衣した分けでもない主人公がゼロの使い魔の世界を生きていく。

原作ブレイクになると思いますので、ルイズファンやサイトファンは読まない方が良いと思います。

私の文は駄文です。

それでもOKだという心優しい方は読んでください。
駄文なんて許せない！と、言う方は申し訳ないですが読まないで
ただけるとありがたいです。

プロローグ 転生？憑衣？（前書き）

まだ恋姫の二次小説を完結させていないのに、ゼロ魔の二次小説を書いてしまいました。

大まかなプロットはありますが、詳細なプロットはないので自転車操業になると思います。

恋姫の二次小説も完結するつもりなので頑張ろうと思います。

ブログ 転生？憑衣？

俺は仕事を終え、帰宅の途についた。

「疲れたな……」

会社を出ると人通りも疎らで空には月が出ている。

今日は早く帰ってのんびりしよう。

運動不足なので歩きで会社と自宅の間を往復している。

始めた頃は体に堪えたが、大分慣れてきた気がする。

と、言いたいところだが、三日坊主ならぬ二週間坊主になりそうだと、

仕事が終わって家まで片道10キロ位の道のりをウォーキングするのが日課になっている。

俺は歩きながら心の中で愚痴をこぼした。

俺がウォーキングを始めた理由は体型がデブになってしまったからだ。

不摂生な生活をしているという自覚はあったが、仕事が忙しいと顧みなかった。

お陰で80キロを超える巨漢になった。

身長が高ければまだ良かったが、残念なことに俺の身長は160cmだ。

明らかに俺の分類はデブだろう。

後悔後に立たず。

現在の俺は会社と自宅の間を毎日歩いて往復している訳だ。

家に帰ったらゼロの使い魔のDVDでも見るかな。

楽しいことを考えないと自宅への道のりがとてつもなく遠く感じてしまう。

俺がゼロの使い魔のDVDのことを考えながら家路を急いでいると雨が降り出してきた。

「う、最悪だ。今日の天気は晴れだったはずだろ」

予告なしの雨にうんざりしながら俺は駆け足になった。

現在居るこの場所から家まで5キロ以上ある。

俺の今の行動は意味が無い。

家に辿り着く頃には濡れ豚のできあがりだ。

バスに乗るにしてもバス亭まで1キロ位先にある。

うっ、恨めしいことに目の前をバスが通り過ぎた。

俺って不幸だな・・・・・・・・。

雨に濡れたくない俺は雨宿りできそうな場所が無いか探しながら走った。

俺は5分程走った。

当然、デブの俺はバテた。

「ゼエ・・・ゼエ、ゼエ。きつ過ぎる。俺、体力無さ過ぎだろ」

膝がガクガクしてつらい。

これぐらいでバテるなんて俺ってやばくない。

「俺がなんでこんな目に遭わなきゃいけないんだ」

俺は自分の体力の無さに愚痴を吐いた。

周囲を見ると目の前にいつも通るトンネルが見えた。

俺は雨に濡れながらトンネルへ走った。

「せっかく雨宿り出来たが無駄になったな。背広がびしょ濡れじゃんか。最悪だ・・・・・・・・」

俺は濡れた背広を見ながら毒突いたが、じっとしていても気持ち悪いただけなので、気持ちを切り替えここで雨宿りをせず帰ることにした。

早く風呂に入りたい。

俺はトンネルを抜けようと歩き始めた。

「トンネルの出口が遠くないか？」

俺は誰もいないトンネル内で自分自身に問いかけた。

「疲れている上に雨に濡れたから力がでないのかな」

確かに体が妙に重い。

なんなんだよ！

風邪でも引いちまったのか。

最悪だ………。

俺はブツブツと文句を口にしながらトンネルの出口に向かった。

出口を出ようとしたら、いきなり視覚を失うような光が前面に広がった。

「うっ！」

俺は咄嗟のことに目を瞑った。

目を瞑っても視界が真っ赤だったので暫く目を瞑ったまま立ち尽くした。

「これ何なんだよ！」

今日は本当に最悪だ。

しばらくすると光が収まったような気がした。

睨み越したが先ほどより光が落ち着いている気がする。

何か鳥の声が聞こえるのが気になる。

今、夜だよな。

俺は恐る恐る目を開いた。

「な、なんだ・・・・・・・・。ここは」

目の前には西欧の庭園のような場所が当たり一面に広がっている。

数百メートル位先に巨大な屋敷が立っている。

おいおい、冗談だろ。

何なんだよここは・・・・・・・・。

「ロベール坊ちゃん！ここにいらしたのですか。心配させないでください」

人の声がしたので振り向くと、いきなり声の人物に抱きかかえられた。

俺は動揺して、頭の中がパニックになった。

「ロベール坊ちゃま。何なんですか？この変な服……。。ダブダブじゃないですか。それに濡れていますよ」

声の主は俺のことをロベールと呼びながら、俺の顔と服を交互に見た。

声の主は女だった。

格好はメイド服だと思う。

抱きかかえられているので彼女の全身は見えないので俺の想像だ。

80キロの俺をどうして、こんな女の子が持ち上げることができるんだ。

それ以前にロベールってなんだ。

俺は久留米正一郎、26歳だ。

断じて、坊ちゃまと呼ばれるような年齢じゃないぞ。

何か目線の高さが変じゃないか？

俺は彼女に腰から抱きかかえられているのに、彼女との目線が異様に近い気がする。

背が縮んだわけじゃあるまいし……。。

「お、おい、俺の手が見えない……………」

俺は動揺しながら自分の手を何気なく見て驚いた。

俺の背広が大きすぎて手が見えない。

「は……………はは……………」

「ロベール坊ちやま。こんな大きな服を来たら手が見えないのは当たり前ですよ。リラのことをからかってらっしゃるんですか？それより、こんな濡れた変な服さっさと着替えますよ。早く着替えないと風邪を引いてしまいます」

リラと名乗った女は私にむっとした表情を一瞬し一言抗議すると、私を抱いたままあの巨大な屋敷に向かって歩きだした。

俺は訳が分からずにいた。

「はは……………。ここは何処？俺は誰？」

「また恍けて、ロベール坊ちやまじゃないですか」

俺ってロベール？

俺の頭の中は完全に混乱していた。

第1話 状況確認

俺はあの後、リラに巨大な屋敷の中に連れていかれた。

彼女は屋敷内の一室で濡れた俺の背広を脱がし、俺に別の服を着替えさせた。

その間の俺は彼女にされるがままだった。

頭の中は混乱していたし、状況がまるつきりつかめないのだから仕方がないと思う。

俺はあれから1週間が経過し少し冷静になることができた。

今の生活に戸惑いはあるが、現状を受け入れるしか無いと諦めている。

しかし、俺は何もしなかった訳じゃない。

俺の置かれている状況を自分なりに調べてみた。

殆どがリラからの情報だ。

彼女は俺の専属メイドだそうだ。

俺の年齢は5歳で金髪碧眼の幼児である。

幼児なので将来のことはわからないが、容姿は美形の部類に入ると思う。

俺の立場はブリタニア王国の皇太子であり、ノルデ公爵家の長子だ。王族なのに公爵家の長子である理由はノルデ公爵家がトリステイン王国の貴族でもあるからだ。

3000年位前にノルデ公爵家の7代目当主グロム二世がトリステイン王国の北側に位置するブリタニア王国を滅ぼした。

ブリタニア王国は周囲を海に囲まれた大陸を支配していた国だ。

グロム二世は滅ぼしたこの国の王に即位した。

この即位にハルケギニア中の列国が猛烈に抗議してきた。

グロム二世はこの抗議を予想していたらしく、いずれハルケギニアの列国が武力で自分を討伐しにくると見越し、ノルデ公爵領を捨て、ブリタニア王国に一族全員で移動した。

こんな真似が出来たのはノルデ公爵家の出自にある。

ノルデ公爵家は元々海賊だ。

ノルデ公爵家の先祖はトリステイン王国の沿岸部の街を中心に暴れ回っていた。

彼らに手を焼いていたトリステイン国王は領地と爵位を与え、自分の末娘を嫁に出すことでその行為を止めさせた。

これがノルデ公爵家のはじまりだ。

グロム二世はノルデ公爵領を捨てることを決断したが、簡単に決断した訳ではない。

グロム二世が領土を捨てた理由は、ノルデ公爵領で列国と相対すると平地での野戦となり数の暴力で袋叩きにされ勝ち目がない思ったようだ。

その点、ブリタニア王国は海に囲まれどうしても大軍を率いるのは難しい。

ノルデ公爵軍は操船技術に長けているので、海上での戦いの方が利が多かった。

戦略的観点からグロム二世は領土を捨てることにしたということだ。貴族は名誉を重んずるが、グロム二世は名誉より実を取ることにしたのだ。

グロム二世達が移動を終えた頃、ハルケギニアの列国が大軍勢を率いてブリタニア王国を襲撃してきた。

ノルデ公爵軍はブリタニアが海に囲まれている地の利を利用して、海上でゲリラ戦を行うことでその軍勢を打ち破ることに成功した。

この勝利を機に彼らは大陸に攻め入り、戦争の前に手放したノルデ公爵領を奪還した。

グロム二世はノルデ公爵領から南下し、トリステイン王国王都を包囲しトリステイン国王に要求を飲ませた。

1つ、ノルデ公爵家の当主がブリタニア王国の国王になることを他国に先駆けて承認すること。

2つ、他国に対しノルデ公爵家の当主がブリタニア王国の国王になることを承認するように尽力すること。

3つ、ノルデ公爵家の領土は今まで通り領有を認めること。

4つ、ノルデ公爵家の政治・外交・軍事はトリステイン王国の許可を必要としない。

5つ、トリステイン王国はいかなる賦役もノルデ公爵家に課してはならない。

ノルデ公爵家はトリステイン王国の貴族であるが、名実共にブリタニア王国の王族になった。

ガリア王国、アルビオン王国もノルデ公爵軍の予想以上の精強さに、渋々ながらブリタニア王国の王位就任を認めた。

これ以来、ノルデ公爵家とトリステイン王国との仲は険悪になった。

ブリタニア王国とノルデ公爵領の国策は重商主義に重きを置いている。

また、海運業も盛んだ。

海賊仕込みの操船技術でロバ・アル・カイリエまでの海路を切り開き巨万の富をブリタニア王家にもたらしめている。

それらで得た潤沢な資金を利用し、王家は教育・軍事・農業に力をいれている。

この国はハルケギニアの国には珍しく平民の地位は酷くないらしい。トリスティン王国では平民の地位は家畜と変わらないらしく、ノルデ公爵領への亡命者が後を立たないらしい。

俺は今までの話をリラから聞いたとき、聞き覚えのある言葉を幾つか耳にした。

1つ目は、ハルケギニア。

2つ目は、トリスティン王国。

3つ目は、ガリア王国とアルビオン王国。

ゼロの使い魔の世界に出ている用語じゃないか。

俺は試しにヴァリエール公爵を知っているかと聞いてみた。

リラは俺を変な目で見ていたが優しく教えてくれた。

ノルデ公爵領の東側にヴァリエール公爵の領地があることが分かった。

ツェルプストー辺境伯のことも聞いた。

ヴァリエール公爵の領地の更に東側が領地だと分かった。

それから魔法のこともリラに聞いた。

「来年杖と契約できますよ」

と、リラは俺に教えてくれた。

確信は持てないがこの世界はゼロの使い魔の世界のような気がする。

しかし、なんで俺はこんなファンタジーの世界に迷いこんだんだ。

胡蝶の夢みたいだ。

俺はあのトンネルで車に引かれ植物状態になり夢を見ているんじゃないかと思うことがある。

と、思っていたこともあったがそれは考えないことにした。

今の俺は幼児だから調べるにも限界がある。

どういう訳か喋るのは問題ないみたいだ。

原作の才人は使い魔契約をするまで、この世界の言葉が分からなかったはずだ。

わからないことが多過ぎる。

手始めに文字を勉強した方が良かな。

文字が分かれば本から情報を得ることができる。

俺の家は王族で、公爵家なんだから蔵書は沢山あるはずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7172x/>

ハルケギニアの獅子心王（仮）

2011年10月20日02時16分発行